

95

## 本邦において正統の整形外科学を確立した 神中正一(1890-1953)(その二)

小林 晶

福岡整形外科病院

(承前) 神中の業績の集積は「神中整形外科学」であり、「神中整形外科手術書」である。優れた教科書のない時代であったから、この両書はともに洛陽の紙価を高め、後には古本屋でもかなりの高価で取引された。戦時下、戦後の混乱期に、血のにじむような努力と時間をかけ執筆する姿は、多くの人達に無言の叱咤激励と映った。一人で書き、全て自験を基にし、自分で描いた挿図を用いるという、世界でも類を見ない深さと広さを持っている。手術書の図は術中消毒した鉛筆とすりガラス板を座右に置き、所見をスケッチして自筆で描いたものである。

業績の中心は生涯心血を注いだ関節成形術(現在では関節形成術)の研究であった。これには教室が総力を挙げて取り組み、前任者の住田正雄教授が遊離大腿筋膜挿入を最高としたものを、さらに改良、河野左宙(新潟大学名誉教授)とともにJK膜を考案した。材料としては自家大腿筋膜をクローム処理して、刺激を少なくしたものである。この研究は戦時、戦後に継続され、教室員は米の配給券と入手しにくい国鉄の切符を手に術後調査を行った。この研究は昭和23年日本整形外科学会の宿題として報告され、人工関節の出現までは頻繁に行われ患者の悩みを解決し福音となった。昭和24年に出版された「関節成形術」はこの集大成で、後任の天児民和教授に手渡すとき、扉に「匙を投げられた病者の為に」と書いて贈った。

神中は医学面の業績のみならず、昭和8年教室の建築が計画されるや、欧米のそれを参考にするのは勿論、独自のアイディアで設計し、天井の防音材料、歩行練習用の廊下、結核患者用の日光浴室、下肢障害者用の便所など、当時としては極めて巧妙で斬新なアイディアのもとに建築を行った。幸いにこの建物は九大医学部キャンパス内に現存している。

昭和25年日本学士院は神中を会員として選ぶに当たり、「神中の研究態度は臨床医学者の模範とすべきものである。研究テーマは全て臨床に直結し、解剖学的研究から手術術式を考案し、厳しく自己の治療法を批判し改善した」と異口同音に讃えた。神中の一生は常に前進であり、一瞬の停滞もなかった。常に先頭に立って言葉ではなく実践して示した。門下から十数名の教授を輩出し、教室の正統な整形外科学を学ぶために全国から見学者が訪れた。まさに「桃李不言下自成蹊」であった。偉大な学者であると同時に一臨床医であって、大学における臨床医学教室の在り方を示したといえる。

神中はこのように整形外科学の確立に努力したが、その真髄は前回述べた昭和7年の「整形外科学ノ現在及将来ニ就テ」の学生講義で知ることができる。繰り返して内容を示すと、整形外科と外科の適応の差異、外傷外科への参与、義肢学への寄与、平時の産業構造の変化への貢献、肢体不自由児への対応、スポーツ医学の担当、自由度の大きい我が国の医療などの特徴を挙げ、発展の成否は我々の努力如何にかかり、吾人の責任は大きいと戒めた。これは今から80年前の炯眼によるもので、戦後、全大学や医療機関に整形外科が設立され重要度が拡大するにつれ、整形外科学会会員は今や2万3千人を凌駕している。神中のこの予見は見事に的中したと言わざるを得ない。

演者が表題で「正統」と表現した理由は、神中が述べた整形外科と外科の適応の差であり、後者が「切り取る= cut off」ことに主眼があり、前者はこれと異なり治療の主体は「再建する= recon-struct」ことからスタートする姿にレーゾン・デートルがあるからである。

神中は戦時中、福岡市の空襲で長女を失い終戦直後の混乱に大きな衝撃を受け、停年前の昭和28年惜しまれつつ九大を退官した。そして九州厚生年金病院院長に就任したが、途半ばにして同年7月6日、北九州地方を襲った記録的台風の中で逝去した。享年63歳であった。